

能楽雑感（160）～ 副地頭について

副地頭について～能楽雑感（160）

最近、同好会の番組で、地頭の他に、副地頭の氏名を明記する例を散見するようになりました。結構なことと思います。

素謡は、シテを盛り立てると同時に、参加者全体の音楽的な調和を目指すものですから、これを統括する人物がいなくてはならず、その立場にあるのが地頭です。

しかし、私の経験では、地頭だけで全体の音楽的調和を維持することは、かなり難しく、地頭をサポートする副地頭の存在が極めて重要だと確信しています。

副地頭は単に地頭に従っていればよいだけではありません。副地頭固有の務めがあり、その責務を全うできる実力が求められます。

洋楽に例えれば、地頭が指揮者だとすれば、副地頭はコンサート・マスターとでも言えそうです。

以下、私が認識している副地頭の責務を述べてみます。

その一つは、地頭との調和です。

地謡の音の高さや音量を決めるのは地頭の役割ですが、副地頭は地頭が発声したら、瞬時にそれに追従して発声し、以後、地頭と心をつ一つにして、高低、音量、緩急について地頭の意図に添うようにしなくてはなりません。

副地頭は、地頭よりも先に飛び出してはならず、地頭よりも後に声を残してはなりませんから、全身を耳にして、地頭の謡を身体に取り込む必要があります。

ハネ張り、メラシ、音調の転換、大きな間、モチ、生み字下げ、部分的強調など、高度な謡になると様々な扱いがあります。

これらについて、地頭が事前に地謡参加者と申し合わせをすることもありますが、そうでないときは、副地頭が自ら謡いながら、次に来る地頭の扱いを察知して、それに追従していくのが理想と言えますでしょう。

しかし、地頭と副地頭が声を揃えるべきであると言っても、息継ぎまで揃えてはいけません。

地頭は、通常息継ぎをするところを耐えながら発声を続け、次の言葉（私が地頭のときは助詞・助動詞の一字）で息継ぎをしますが、もし地頭が通常息継ぎをする箇所でも息を継ぐようなら、副地頭はその箇所では我慢して声を出し続けなくてはなりません。

もう一つは、地頭に対する助け舟（技術的カバー）です。

地頭は高度の技術を有する人物が担当すべきですが、ときには、そうでもない場合があります。

よくあるのは、地頭が最初の音を明確に出さないために、地謡参加者がどの音を出すべきか戸惑ってしまうケースです。こういう時は、副地頭が地頭に代わって、しかし、さりげなく正しいと思われる音を出してあげるべきでしょう。

ときには、地頭が明らかに音を間違える（柔吟の中音のときが多い）ことがあります。このときは、最初は地頭に合わせながら、次第に、或いは次の節目で、あるべき音に地頭を誘導していくのが副地頭の役割です。

また、連吟とか仕舞の地謡では、無本で謡うことがままありますが、このときの副地頭の役割は飛躍的に重要度が増します。

地頭が絶句したり、詞章を間違えたり、語尾を引くところを切ってしまうたりすることはよくあることです。このときに副地頭が、地頭に合わせてしまったら、喜劇と言うしかありません。さりげなく、しかし、強固たる意志を持って地頭の誤りを矯正していくのが副地頭の責務です。

副地頭の責務を果たすために必要な要素は、追随、協調ではなく、集中力と気働きであろうと思います。